

第3 問題作成部会の見解

「地学基礎」

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 科学の基本的な概念や原理・法則に関する理解を基に、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究する過程を重視する。

問題の作成に当たっては、基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題とともに、日常生活や社会の身近な課題等について科学的に探究する問題や、得られたデータを整理する過程などにおいて数学的な手法等を用いる問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

「地学基礎」では、学習指導要領に基づいて編集された高等学校用教科書「地学基礎」に準拠し、また日常生活や社会と関わる面を含む「地学基礎」という位置付けに鑑み、基礎的な学習の到達度を適切に判定できる問題を目指した。出題範囲は、学習指導要領にある内容に則して、(1) 固体地球、(2) 大気と海洋、(3) 宇宙科学、それぞれの大問を配した。また、自然災害を題材として(4) 地震と津波と関連する災害についても出題した。大問数は4問で、小問は第1問が6問、第2問が3問、第3問が3問、第4問が3問の計15問である。分野別に見ると、「固体地球」から2問、「岩石・鉱物」から2問、「地史・地質」から2問、「大気・海洋」から3問、「天文」から4問、「環境・災害」から2問出題した。「環境・災害」分野の2問は、それぞれ固体地球、大気・海洋の各分野に関連する問題をそれぞれ1問出題した。第3問だけでなく、第2問や第4問でも天文分野と関連する内容を出題した。なお、共通テストの問題作成に当たっては、従来の基本方針と同様に教科書に記載されている事項を基礎とし、科学的な思考力・判断力・表現力等を測る設問に重きをおいたが、限られた時間内に解答できるように、知識を活用する問題、知識の理解を問う問題も適宜組み合わせ構成した。そして図から必要な情報を読みとり、思考・総合し(第1問A問2)、人間社会と地学との関わりを考え、環境・災害(第4問)に関連する問題に重きをおいた。さらに、問題の難易度や、全体のバランス、解答に要する時間などに配慮した。

第1問A 問1は、地球型惑星の形、大きさ(重量、体積)に関する諸量のデータを用いて、形を表す偏平率と密度についての理解を問う問題である。問2は、地殻変動量の年変化のグラフから情報を読み取り、地震時に起こる地殻変動について考察する問題である。

第1問B 問3は、日本列島における火山岩の分布の特徴と火山フロントの位置関係を理解しているか、また、日本列島の火山の地下では、マグマが固結して大陸地殻を形成していることを理解しているかを問う問題である。問4は、海洋地殻における地殻の厚さ(マントルまでの深さ)、及びマントルを構成している岩石とその密度についての理解を問う問題である。

第1問C 問5は、古生代の地球環境に関する知識を問う問題である。問6は、古生代の生物に関する知識を問う問題である。

第2問 問1は、地球を含めた地球型惑星のエネルギー収支と温室効果についての理解を問う問題である。問2は、亜熱帯の環流と、南半球の高緯度における風及び南極周極流の流向に関する理解を問う問題である。問3は、深層循環の時間スケールの理解と、地球温暖化の進行がもたらす影響についての思考を問う問題である。

第3問 問1は、太陽系の起源について、宇宙開闢かいびやくからのつながりを意識して理解を問う問題

である。問2は、太陽系天体の起源について、最新の学術知見から原始惑星形成についての理解を問う問題である。問3は、太陽活動の周期性について、実測データから、その特徴を確認する問題である。

第4問 問1は、地球環境と自然災害に関する問題で、土石流についての基本的な知識を問うものである。問2は、オゾンホールが南極上空に太陽光が当たりはじめる季節に出現することを示し、南半球と北半球で季節が逆であるという知識を利用して、南極昭和基地上空のオゾン層の気温とオゾン濃度の季節変化を表す図を選択できるかを問う問題である。問3は、太陽の明るさと半径、表面温度の関係を与えて、図から太陽の明るさの変化を読み取り、ハビタブルゾーンについての基本的な理解を問う問題である。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員（以下「高等学校教員」という）からは、日常生活や社会と地学現象との関わりを、教科等横断的な視点から、正しい科学的根拠に基づき思考、判断できるようにする力の育成は、地学基礎を学ぶ大きな目的の一つであり、全ての高校生が学ぶべき内容であることから、自然環境の変化や自然災害に関する内容を継続的に大問として出題している点が評価された。また、日本地学教育学会からは、観察・実験に取り組んだ受験者の学習成果を評価する問題や、身近な資料や最新の地学に関する情報を活用した出題が評価された。一方で、思考力・判断力・表現力等を問う問題数が増加したことにより、全体として難易度が上昇した旨の指摘があり、引き続き検討したい。

第1問A問1について、高等学校教員からは「計算がしやすくなっている。表のデータから読み取らせる良問である」、地学教育学会からは「地球の概観に関する基礎的な問題であり、その内容を他の惑星に置き換えて考えさせた点も良い。密度の計算において計算しやすい工夫がなされている」と評価された。問2について、高等学校教員からは、グラフから必要な情報を読み取る力と思考を問う良問、地学教育学会からも、基礎的な良問であり、グラフにも工夫が見られるとの評価であった。教科書によって該当する図の掲載の有無が異なるとの指摘もあったが、与えられたグラフのみから解答可能であり、正答率も高かった。

第1問B問2について、高等学校教員、地学教育学会ともに、最新の話題であり、基礎的な問題であるが、知識だけでなく思考も問われる良問である、との評価であった。一方で、予定海域の位置があいまいであること、題材が十分に活用されていない点が指摘された。問3は、地学教育学会から、火山フロントや海洋地殻形成に関する基本的な問題と評価された。火山前線や海洋地殻形成に関する文章の正誤を判断する点は適切だが、伊豆一小笠原海溝のように、島弧において海洋プレートが海洋プレートの下に沈み込む断面図は、2社を除く教科書に掲載されておらず、採用が不適切であると指摘された。ただし、肝心の箇所には下線が付されて混乱を抑えた点は適切と評価を得た。正答率も高かった。

第1問C問5は、高等学校教員、地学教育学会とも、原始大気の変遷に関する基礎的な知識問題であるとの評価であった。地学教育学会から、酸素濃度の上昇によるオゾン層の形成について記述のない教科書があるとの指摘があったが、正答率は高かった。問6は、高等学校教員及び地学教育学会から古生代の生物進化に関する基礎的な知識問題であると評価された。「出現」「繁栄」などの言葉の違いを強調したほうが分かりやすいとの指摘は、今後の参考としたい。

第2問問1は、高等学校教員からは思考を問う良問との評価を受けた。アルベドに関する記載が教科書によって差があるとの指摘を受けたが、定性的な大小関係を考えさせるため問題は

ないと考える。地学教育学会からは単純な知識問題にとどめない工夫が見られるとの評価を受けた。また、8択であることも含め、問題全体としてはやや難易度の高い問題であるとの指摘を受けた。今後の参考としたい。問2については、高等学校教員からは、普段なじみのない南半球の海流について考える点や、海流の流れ方から場所を判断する点がやや難しいと評価された。地学教育学会からは、南半球の風と海流について問うことの妥当性について指摘があったが、教科書に南半球の風や海流は図示されていることから出題内容に問題はないと考えている。また、両者から「〇〇向きの海流」の表記について、流れてくる方向と流れていく方向があいまいなので、明確に示すことが指摘された。風や海流の向きについては、受験者が誤解しない表現を検討する。問3は深層循環の時間スケールの理解と、地球温暖化の進行がもたらす影響について問う問題で、地学教育学会ならびに高等学校教員から、誘導が丁寧で解答しやすく、知識のみならず思考も問われる良問であると評価された。

第3問問1は、高等学校教員からは、宇宙の晴れ上がりに関する基礎的な知識問題である、微惑星のスケールについての細かい知識が問われている、との指摘を受けた。地学教育学会からは、基礎的な内容であり、本試験に出題された同分野からの問題に比べるとやや平易である、微惑星の直径を問う設問は、やや細かい知識を要求していると言える、との評価であった。正答率は良く、この結果からは適切な出題であったと判断している。地球のサイズの常識から惑星の典型サイズを推測できれば、簡単に微惑星サイズの選択肢を特定できたということであろう。問2について、高等学校教員、地学教育学会から、B、Cの領域に見られる白く抜けた部分についての説明がなく、「上から」「横から」という表現もあいまいであったため受験者が戸惑ったのではないかと指摘があったが、正答率は標準的であった。問3について、地学教育学会から、発展的内容に位置付けられる黒点の数の周期を扱う設問を出題することについては、その是非を議論する必要があるとの指摘を受けたが、正答率は高かった。

第4問問1について、高等学校教員からは、容易に正答できる問題と評価された。地学教育学会からは、選択肢の文言は図がないと分かりにくいとの指摘があった。また、ハザードマップの重要性を示すメッセージとなっていることが評価された。問2については、オゾンホールが南極上空に太陽光が当たりはじめる季節に出現することを示したうえで、南極昭和基地上空のオゾン層の気温とオゾン濃度の季節変化を問う問題で、高等学校教員、地学教育学会ともに、思考力・判断力・表現力等を問う良問との評価であった。地学教育学会から、南半球と北半球で季節が逆であることや、太陽光が当たり始める季節が春であることも示した方が良かったのでは、高等学校教員からは、「オゾン層の気温」でなく「地上の気温」にすれば南半球の季節に注目させることができたのではという指摘を受けた。今後の参考としたい。問3について、高等学校からは、問題の与え方に配慮がある良問である点、地学教育学会は、図を示して、「明るい／暗い」等を問う形が、評価された。内容は「地学」の範囲で、出題方法には議論の余地があると指摘された。正答率は非常に高かった。

4 まとめ

本年度の試験問題は、共通テストの目指す方向に沿ったもので、その構成はおおむね妥当であり、分量及び難易度もほぼ適切で、受験者は解答時間内に十分に取り組めたと判断されている。今後の問題作成についての方向性について以下に集約する。

- (1) 教科書に基づいた基礎的な内容の知識・理解に重点を置きつつ、文章や図、そしてグラフをきちんと読み取り、又は正確な計算と思考が求められる問題等、地学的な思考力・

判断力・表現力等を問う問題の出題に努める。

- (2) 全ての問題が学習指導要領「地学基礎」の範囲内から出題されているが、15題中6題が天文分野からの出題が目立ったため、分野間のバランスも考慮して出題する必要がある。
- (3) 問題で使用された資料等の題材等は、特定の教科書には偏らないことが求められる。
- (4) 観測データや観測結果に基づいた設定場面の問題が出題された。一方で、実験室で行うことのできる実験や屋外での観察などの場面を想定した出題は少なかった。実験における仮説の設定や検証方法、又は実験結果を考察する場面を設定し、生徒どうしや先生との言語活動を通して思考する問題が出題されると、高等学校の授業でも探究的な活動を取り入れやすくなると考える、との指摘があり、今後の参考としたい。
- (5) 設問数、配点、設問形式等は適切である、との評価であった。
- (6) 文章表現はおおむね適切である、との評価であった。

「問題の難易度は適切である。本試験の難易度が高かったため、受験者から敬遠される科目にならないよう、本試験と追試験の難易度を合わせて適切なものにしてほしい」との要望もあった。

『地学』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する。

問題の作成に当たっては、基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題とともに、観察、実験、調査の結果などを数学的な手法等を活用して分析し解釈する力を問う問題や、受験者にとって既知ではないものも含めた資料などに示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題などを含めて検討する。その際、基礎を付した科目の内容との関連も考慮する。

2 各問題の出題意図と解答結果

「地学」では、学習指導要領及びそれに基づいて編集された高等学校用教科書「地学」（令和8年度は1社のみ）に準拠し、当該分野の学習の到達度や学習した知識を総合的に考える能力を適切に判定できる問題を目指した。出題範囲は学習指導要領にある「(1)地球の概観」「(2)地球の活動と歴史」「(3)地球の大気と海洋」及び「(4)宇宙の構造」の四つの大項目に関連する内容で、特定の分野に偏らないように留意した。問題構成は、これらの項目に加えて、総合問題として結晶構造から宇宙の構造までのスケールの異なる様々な地学現象を問う大問を冒頭に置き、令和7年度同様に大問数5問、小問数27問とした。問題作成に当たっては、従来の基本方針と同様に、教科書に記載されている事項を基礎とし、範囲を超えないように考慮した。また、共通テストの目的に沿って、地学現象の理解を多方面から問う問題（総合問題：第1問）、科学的な見方や考え方の能力を測ることができ、かつ限られた時間内に解答できる設問を心掛けた。できるだけ、基礎的な問題構成を心掛けると同時に、図を用いて思考・判断する設問も多く含めた。そして、このような点も配慮しつつ、平均点が適切になるよう試みた。

第1問 問1は、地球の重力が万有引力と遠心力の合力であり、緯度によって重力の大きさが変わることの理解を振り子時計の実験を通して問うことで、判断する力を問う問題である。問2は、変成岩と関連する鉱物の特徴への理解を問う問題である。片麻岩の特徴と、低圧型変成作用と高圧変成作用のそれぞれで形成される鉱物の種類の理解を問う問題である。問3は、乾燥断熱減率と湿潤断熱減率に関する理解を問う問題で、グラフの読み取りと湿潤空気断熱変化の理解に基づいて解答する問題とした。問4は、地層における化石の産出記録に基づき、地層の対比についての基礎的な知識と理解を問う問題である。問5は、銀河の構成物質や星形成の過程に関する理解を問う知識問題である。

第2問 問1は、マントルと核の物理的な性質に関する理解度を問うた。問2は、重力・地磁気・地震・地殻熱流量に関わる地球内部の構造や状況について、基本的な事象の理解度を問う問題である。問3は、測量技術（VLBI）の原理と、海洋プレートの移動及び地震発生時の地殻変動に関する理解度を問う問題である。問4は、図から断層の運動方向の情報を読み取った上で、岩盤にはたらく力の向きを正しく推定できるか思考を問うた。

第3問A 問1は、大陸地域の地下の地殻からマントルにいたる層構造について、模式柱状図を見て各層の構成を判別し、その岩石の種類と物質の性質を理解しているか問う問題である。問2は、世界地図に表示された活火山の分布に基づき、プレートテクトニクスとマグマの発生機構の関連を理解しているかを問う問題である。

第3問B 問3は、地質図から断面図を考察する力があるか、また、断層の種類を理解しているかを問う問題である。問4は、地質図から地下構造を読み取り、地形との関係を考察する力を問う問題である。

第3問C 問5は、斜長石が結晶化する際の温度変化に伴う化学組成の変化に基づいて、斜長石の化学組成の累帯構造から推察されるマグマだまりでの現象を考察する力を問う問題である。問6は、石質隕石を代表する粒子であるコンドリュールについて顕微鏡写真を参照しつつ、その成因の理解を問う問題である。

第3問D 問7は、河川の侵食・運搬・堆積作用の基礎知識を用いてグラフの特徴を読み取り、河川堆積物の粒径と粒径分布の関係を思考する力を問う問題である。問8は、代表的な示準化石の名称と地質年代との対応関係に関する知識を問う問題である。

第4問A 問1は、エルニーニョ現象に関してエルニーニョ発生時の大気と海洋の状況を把握しているかを問う問題である。

第4問B 問2は、回転水槽実験を通して、大気の大循環に関する理解を問う問題である。問3は、回転水槽実験を通して、偏西風波動に関する理解を問う問題である。

第4問C 問4は、風の吹く時間(連吹時間)と、風の吹く距離(吹走距離)との関係を示した図から、与えられた条件のもとで波高がいくらになるか読み取る能力を問う問題である。問5は、海洋の水温・塩分の鉛直分布の特徴と海域による違いについての理解を問うた。

第5問A 問1は、ハッブル・ルメートルの法則や宇宙原理などの理解度を問う問題である。問2は宇宙の年齢、観測の限界(地平線)、地平線近くの遠方の銀河の観測について問う問題である。問3は、3K宇宙背景放射、その詳細観測に基づくダークエネルギーの存在などの理解度を問う問題である。

第5問B 問4は、食変光星の理解を、系外惑星観測の文脈に応用する思考問題であるが、直観的に分かりやすい部分に焦点を絞った問題とした。問5は、図に基づいて、予想される観測結果を導く思考問題であり、高等学校における探究活動を意識して出題した。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教員からは、全体としては、地学における基本的な概念や原理・法則の理解を問い、科学的な自然観の習得を確かめる良問が多かったとの評価であった。高等学校理科では、観察や実験を通して得られた情報を、図やグラフといった効果的な手法で集約・提示し、そこから基本的な原理や法則を導き出すという姿勢が学校でも意識されており、実験や観察といった出題形式をとり、様々な形で情報を提示するという工夫が理解された。ただし、地学の授業において、分野によっては授業時間内での実験や観察の実施が困難なものも多くあり、作問に際しての出題者の意図を明確にすることが求められる。

第1問 問1については、高等学校教員からは、振り子の周期が重力加速度に反比例することを理解しておく必要があったため多少難しいが、地球楕円体についての理解を問う良い問題であると評価された。一方、地学教育学会からはリード文は長いが内容は標準的で、万有引力や重力加速度の違いを検証する定番の実験を題材としているとの評価であった。問2については、変成岩を扱う基本的な問題ながら、馴染みの薄いひすい輝石を対象にしたことが正答率を下げた要因となったのでは、とコメントがあった。実際の画像を掲示したり、鉱物の安定条件を問うなど、作問の工夫が要求された。問3について、高等学校教員、地学教育学会ともに、断熱減率の理解に加えて、グラフの読み取りを組み合わせ思考を問う良問とのコメントだった。特に地学教育学会からは、計算だけでなくグラフ上の作図によっても解答

可能である点が評価された。問4は、地学教育学会から、受験者にとっては取り組みやすい問題で、設問の設定についても思考や判断を問う良問との評価を得た。問5は、高等学校教員及び地学教育学会から、基本的な問題であるとともに、鮮明な画像を用いたことについて肯定的な評価を受けた。

第2問 問1について、高等学校教員からは、問題中の前節の部分の情報・知識を活用することで、解答できる良問であったと評価された。地学教育学会からは、基礎的な知識を問うものが中心だが、単なる暗記ではなく、工夫が見られ、地学の重要事項を網羅した良問であり、思考を問う側面も良いと評価された。問2について、高等学校教員からは特に指摘はなかった。地学教育学会からは、重力、地磁気、地殻熱流量といった固体地球の広範な内容の知識と具体的事例の理解が求められること、一部に教科書の参考欄の内容を含むことから、難易度は高いとの指摘があった。問3については、高等学校教員からはVLBIの知識をもとに海溝型地震の発生によるプレートの位置変化を思考させる良問との評価だった。地学教育学会からは、プレート位置の変化をグラフから読み取るといったような、更に思考を深めるための工夫が必要との指摘があった。問4については、地学教育学会からは、発震機構の基本知識を活用させる共通テストに相応しい良問であり、図もわかりやすく、地震による変位から力の方向を導き出す思考力・判断力・表現力等を問うのに適した問題であると評価された。

第3問A 問1について、地学教育学会から、地殻からアセノスフェアまでの物質構成や状態を問う基礎的な知識問題であり難易度の調整の面でも適切である旨の指摘を受けた。また、図の活用による視覚的な理解を促す工夫やアセノスフェアとマグマ発生の混同に注意を要する点でも良問との評価を得た。問2について、高等学校教員、地学教育学会いずれからも、海嶺を除いた火山分布の提示や、会話文形式の採用などの作題上の工夫についての評価、標準的な難易度に調整されているとの指摘を受けた。地学教育学会からは、火山分布とマグマの発生条件、岩石の特徴を問う、基本的な知識問題であると評価を得た。

第3問B 問3、問4は、高等学校教員からも地学教育学会からも地質図に関する問題の必要性は理解され、地学教育学会からは標準的な思考問題という評価を受けた。一方で、高等学校教員からは難易度が高いという指摘もあったので、今後工夫をしたいと考えている。

第3問C 問5について、地学教育学会から、結晶分化作用に伴う斜長石の組成変化やマグマ混合を問う上で、累帯構造のような一つの結晶内で組成が変化する現象の理解は困難であるとの意見があった。図の提示や丁寧な補足がなければ正解への到達は厳しい難問であるとのことなので、図の重要性が浮き彫りとなった。今後の参考としたい。問6について、地学教育学会からはコンドライト隕石の特徴とコンドリュールの成因を問う、教科書の内容に準じた知識問題であるが、無重力状態における液体の表面張力という物理的側面に触れた点や、顕微鏡写真を掲載して視覚的な理解を促した工夫などについて評価を得た。

第3問D 問7は、高等学校教員及び地学教育学会ともに、ヒストグラムの読み取りに基づく基礎的な思考問題との評価で、正答率は高かった。地学教育学会からは、グラフの読解の難易度は平易であるが、地学的な洞察力を測る点で良問という評価を得た。問8について、高等学校教員、地学教育学会から、示準化石の生存年代を問う基本的な知識問題で、正解を導くのは容易であるとの評価を得た。地学教育学会から、スケッチや写真を用いた観察力を問う等の工夫について意見があった。今後の参考としたい。

第4問A 問1については、エルニーニョ発生時の大気海洋変化を問う問題に対し、高等学校教員と地学教育学会の双方から、偏差を問う問題は珍しく戸惑った受験者もいたのでは、という旨の指摘があった。ただし地学教育学会から良問であるとも評価された。

第4問B 問2について、高等学校教員からは、実験や観察に関する問題は是非出題して欲しいが、参考欄の内容ではない内容を出題して欲しいとの指摘を受けた。地学教育学会からは、物理的な知識が必要となり、知識の暗記問題となっているとの評価であった。また、図の掲載を出題意図を理解しやすいよう工夫を求められた。問3について、高等学校教員からは、温帯低気圧の熱輸送の仕組みを理解していない受験者には難易度が高いとの評価であった。地学教育学会からは、低気圧の3次元構造及び熱輸送の仕組みを問う基本問題で良問だが、難易度が高めとの評価であった。解答選択肢に教科書の図解を想起させるような図から選ばせるような工夫を求める提案もあった。

第4問C 問4について、高等学校教員からは、与えられたグラフや図を用いて思考力を問う良問であるとの評価を得た。地学教育学会からも、与えられた条件から情報を抽出する問題解決能力を問う良問である、と評価された。初見の資料を扱う共通テストらしい構成とも評価された。問5は、亜熱帯及び亜寒帯の特融の環境条件の知識を活用し、グラフの読み取りと組み合わせる知識・思考問題である点について、高等学校教員・地学教育学会ともに良問とのコメントだった。

第5問A 問1は、高等学校教員からは条件設定を分かりやすくする工夫された良問と高評価だった。地学教育学会からも、宇宙膨張に伴う銀河の相対的な後退速度を問う基本問題であると評価された。宇宙膨張に関する出題が連続しており、分野バランスにやや偏りがあるという指摘もあった。問2について、高等学校教員からはこのような計算問題は今後も出題して欲しいと要望された。地学教育学会から、リード文にヒントがあり難易度は平易であると評価された。ただし、選択肢の数値設定が容易すぎるとの指摘もあった。問3について、地学教育学会からは、物理的原理を用いて読み解く必要があり、理系的センスや深い理解が試されるが、リード文の情報を活用して考察させる構成で、学習の習熟度を測る良問であると評価された。

第5問B 問4は、高等学校教員からは、データを基に思考を問う良問と評価された。地学教育学会からは現代的なテーマと伝統的な手法を関連させる良問と評価されたが、文章量の多さが懸念として挙げられた。問5は、高等学校教員からは与えられた図・グラフから考察する良問と評価されたが、地学教育学会からは、文章量に加えて表現・構成・高校地学としての専門性に課題が残ると評価され、評価は割れた。

4 まとめ

高等学校教員及びからの出題に関する反響・意見等を検討した結果、以下に示す7項目に焦点化し、今後の試験問題の作成に対し、継続的な取組を意識したい。

- (1) 知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問に引き続き取り組む必要がある。図やグラフを効果的に用いた問題を作成する。
- (2) 今後も学習指導要領に基づき「地学」の全範囲から出題し、特定の分野・領域に偏りを生じないように取り組む。
- (3) 新課程から教科書が1社になった。そのため、教科書の偏りはなく、問題に使用された資料等は教科書に載っていない図も含めておおむね適切であったと評価を受けた。教科書が1社である点では作問のし易さがあるが、一方で新たな課題も見られる。
- (4) 会話文の中で、思考のプロセスが充実した展開も評価された。今後も会話は思考を促す自然なやり取りを意図した適切な作問を行う必要が求められる。
- (5) 設問数、配点、設問形式等についても、全体的なバランスも考え、適切に配慮すること

を意識したい。

- (6) 文章表現・用語などの適切さは引き続き求められる。
- (7) 地質図の読み取りや実験に関する問題などに、やや難易度の高い問題が幾つか見られたとの指摘もあった。平易な問題は少なかつたものの、出題の多くは標準的であり、本試験と比較しても全体としては適切な難易度の問題が多かつた、との評価であった。来年度以降もこの姿勢は求められる。

この数年、「地学」受験者数は少なく、平均点の低い状態が続いていた。今年度は本試験の受験者数が昨年度を上回る2,700人を超え、平均点は昨年度より上がった。しかし他の科目と比べて平均点は低いものとなった。様々な要因が考えられるが、今後、平均点が他の科目とそろそろような問題作りを心掛ける必要がある。また、引き続き、追・再試験に関しても本試験と難易度の差が出ないように、出題の形式や文章の量などの調整しながらの作問をしていくことを考えたい。

また、高等学校教員からは「共通テストの問題には、地学教育という立場からの、高校生や社会全体に対するメッセージ性があると考ええる。出題された問題は、教科書の丸暗記の知識ではなく、探究的な学習や実験などの経験を生かす問題や、実際に行われている研究に関わりのある問題となっていたため、今後もこのような工夫した作問をお願いしたい。」とのコメントがあった。この期待に応えるためにも引き続き、作問に取り組んでいく。